

昭和戦前期横浜の都市生活誌

——横浜市磯子区の下平政熙氏の日記から（1）

吉崎 雅規

● はじめに

本連載は横浜市磯子区に住んだあるひとりの男性の日記から、昭和戦前期から戦後混乱期までの庶民の都市生活の実態を復元することを目的とする。あわせて本日記の叙述から、当該期の都市横浜の世相や情景を、ひとつの地域資料として紹介することも意図している。

連載第一回目の本稿では昭和五年から十一年までの日記の記述から、昭和戦前期の横浜の都市生活の諸相を検討したい。

下平政熙氏とその日記について

まず本稿がおもに依拠する下平政熙^{しもだいらまさひろ}日記¹と、その筆者について解説する。

下平政熙氏は大正六年（一九一七）三月十一日、長野県下伊那郡^{かみさと}上郷村^{みなみじょう}南条（現飯田市上郷飯沼）に生まれた。昭和五年（一九三〇）一月二十日、横浜市磯子区西根岸町^{やぎさ}（現磯子区下町）の谷崎時計店に奉公するため来浜。昭和十九年に出征したが、同二十一年に復員して谷崎時計店に復帰。昭和二十三年一月二十日、磯子区滝頭町字浜（現磯子区中浜町）で下平時計店として独立する。その後は時計店主として終生をこの地で暮らし、平成六年（一九九四）一月十日に死去した。

日記は昭和五年から平成六年まで全六十六冊が残されており、出征中の昭和二十年をのぞき、原則として一年に一冊ずつ記されている。ただ

し、このなかには、日記とメモが混在したものや、のちに別の日記帳に清書される下書きのような帳面も若干含まれる。日記はおおむね日付の入った市販の当用日記を利用しており、とくに昭和二十六年以降は日記帳の老舗博文館の当用日記（一九・〇×一三・五cm）をほぼ毎年使用する。

日記には、日々の時計店での業務（時計等の修繕、得意先廻りの内容等）が主につづられるが、仕事後や休日の娯楽（レコード鑑賞、映画鑑賞、海水浴、小旅行など）についての記述もある。そのほか、新聞やラジオから得たと思われるニュース等については欄外（ときには日記本文）に記されることもある。

本日記をもとにして、筆者は平成二十七年に「時計屋さんの昭和日記——一青年のみた戦中戦後の横浜」という特別展を横浜都市発展記念館で担当し、その内容は同タイトルの展示関連書籍で報告した²。本連載は展覧会の内容と重複する部分もあるが、展覧会ではやむを得ず省いた政熙の生活のさまざまな局面にも目配りしつつ、昭和戦前～戦後混乱期の都市生活の様相を描いていきたい。史料としては政熙日記のほか、政熙が時に応じて記したノート、メモ帳の類も参照し、さらに関係者への聞き取りから得た情報も補足的に用いた。なお、本文中の概説的な記述のうち出典のない事柄は『横浜市史Ⅱ』³におもに依った。史料の引用にあたっては句読点を付加し、吉崎の訂正・補足は〔 〕で示した。

1 日記および関連資料は平成二十七年に下平政熙氏の長男下平修嗣氏より横浜都市発展記念館に寄贈された。

2 横浜都市発展記念館編『時計屋さんの昭和日記——一青年のみた戦中戦後の横浜』公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団、二〇一五年。本節に関する記載は同書収載の吉崎雅規「解題 下平政熙日記」も参照のこと。

3 横浜市総務局市史編集室編『横浜市史Ⅱ』第一巻～第三巻、横浜市、一九九三～二〇〇三年

個人史・生活史について

本稿のように、個人がつけた日記等から個人の生活や人生を検討することについて、学問的には「生活史」「個人史」という枠組みがある。

「生活史」の理解は「一様ではない」とされるが、そのひとつに「個人の生活を追う」「個人的なミクロ的な、固有名詞による生活史」というとらえ方がある⁴。つまり、主体を「固有名詞」のある個人において、その生活を叙述することじたい、意味があるとする考え方である。

もうひとつの生活史のとらえ方として、「個人の生涯を社会的文脈において詳細に記録したもの」とする考え方もある⁵。つまり、社会のなかに個人の生涯を置いてこそ、分析する意味が大きいとする考え方とも言えよう。

一方「個人史」は個人の生涯を叙述するものであるが、個人と時代・社会との関連も重視されている。たとえば、深谷克己は「『個人史』の意義は、人が歴史的環境と相互に規制しあいながら、一生を生きていくなかでの変わりようをいかに深くとらえるかという点にある」⁶と指摘し、歴史的環境との相互関係、人生の「変わりよう」をとらえることの重要性を指摘する⁷。

本稿では下平政熙というひとりの実在した個人を視座に据えて、政熙個人の人生——昭和五年から二十六年までに限定するが——、および社会との関わり、そして政熙の人生と社会の「変化」にも留意しながら、記述を進めていきたい。

日記資料と研究について——横浜を中心に

ここでは、「日記」に関わる資料と研究について簡単にふれておきたい。

明治時代以降、学校教育によって人格形成のための「修養」として日記をつける習慣が奨励され日本の社会にひろまっていく。日記を主体的につけるという行為が「国民教育装置」として利用されたという見解もある⁸。昭和期の日記資料は刊行されているものだけでも膨大にあるが、その紹介を試みた入門的な書籍として、土田宏成編『日記に読む近代日本4 昭和前期』⁹があり、そのなかで庶民日記の紹介もなされている。また、日記の有用性・限界性を議論した座談会も近年おこなわれている¹⁰。

横浜においては、『横浜の空襲と戦災』¹¹が戦中・戦後の庶民日記を全文ではないものの数多く収載している。1（体験記編）には空襲時の記録を中心に昭和十九年から二十年の日記・日誌を紹介、2（市民生活編）には、「戦中・戦後の市民生活の実情」を探るという観点から昭和十二年から二十四年までの日記をおさめており、本書を利用した研究も少なくない。本書に使用された日記の原資料（複写資料）の一部は横浜市史資料室で閲覧が可能で、近年では吉見義明がこれを利用して占領下の民衆の意識などを検討した『焼跡からのデモクラシー』¹²を著わしている。そのほか庶民日記ではないが『横浜市史Ⅱ』の資料編に、神奈川県地方小作官だった

4 中馬邦「歴史としての生活史—日本史を中心に—」『講座生活学3 生活史』光生館、一九九三年

5 森岡清美他編『新社会学辞典』（有斐閣、一九九三年）「生活史 life hisitory」（有末賢執筆）。なお、中野加奈子「生活史研究の系譜—記述と分析をめぐる課題—」（『佛教大学大学院社会福祉学研究科篇』第三九号、二〇一一年）が生活史の研究史をまとめている。

6 深谷克己「歴史学と個人史の研究・叙述」『歴史評論』三四四号、一九七八年。のち深谷克己『深谷克己近世史論集 第一巻 民間社会と百姓成立』、校倉書房、二〇〇九年。

7 なお、個人史研究の意味合い、方法論等については『歴史評論』五三七号（一九九五年）の特集「歴史学と個人史研究」、同七七七号（二〇一五年）の特集「伝記・評伝・個人史の作法を再考する」も参照のこと。

8 西川祐子『日記をつづるということ—国民教育装置とその逸脱』吉川弘文館、二〇〇九年。なお、近代の「日記をつづるという行為」については同書に詳しく、巻末の文献案内も有用である。

9 土田宏成編『日記に読む近代日本4 昭和前期』吉川弘文館、二〇一一年

10 井上攻・佐藤広・永島政彦・増田昭子・安室知「テーマ「日記」座談会〔前編〕〔後編〕」『民具マンスリー』第四六巻第七・八号、二〇一三年

11 横浜市・横浜の空襲を記録する会編『横浜の空襲と戦災』全六巻、横浜市、一九七五～一九七七年

12 吉見義明『焼跡からのデモクラシー』上下、岩波書店、二〇一四年

小嶋英太郎の昭和五年から十六年の日記（昭和六年欠）¹³と、神奈川県知事をつとめた内山岩太郎の昭和二十一年から二十七年の日記¹⁴が翻刻されている。また青年の日記を用いて戦時下・占領期の民衆の意識を追ったものとしては、横浜市外の事例にはなるが、井上弘「日中戦争下の青年」¹⁵、同「神奈川県小田原の一青年の日記よりみた戦時下の民衆」¹⁶、同「神奈川県小田原の一青年の日記よりみた占領下の民衆」¹⁷も興味深い。

1 伊那谷——幼少時代

下平家の家系と祖父・父

下平氏の祖先は諏訪氏の一族・知久氏の家老と言われている。知久氏の居城は神の峯にあったが、天文二十三年（一五五四）七月に武田氏に攻められて落城、城主知久頼元は捕らえられ甲斐へ送られ殺害された。天正十年（一五八二）徳川家康が旧族を元の地に復帰させたので、知久氏も京に逃れていた一族が故地に復した。しかし下平氏は神の峯の落城の際に武士をやめて土民になったままで家臣には復帰しなかったという。

江戸時代の下平氏は農民であった。政熙の曾祖父にあたる利平は評判の親孝行者で飯田の殿様（堀氏）より褒美を賜った。

政熙の祖父国松は慶応二年（一八六六）に生まれ、本家から長屋をもらって分家した。親類から温室の菜園造りの技術を習得して業とし、その後地元の製糸工場である上郷館でも働い

た。祖母は養蚕が上手なひとだった。

政熙の父準太郎は明治二十三年（一八九〇）三月十一日、国松の長男として生れた。「幼なき頃より文学がとても好きで本を手より」離さないという読書家であった。豊橋騎兵十九連隊第三中隊へ入営。大正四年に結婚した。「父は物質的経済的に恵まれず、小作農を主として若い時に習得したざるかごの竹細工をしたり、冬には道路工事・トンネル工事・堤防工事の工夫として働きに出た」。このような苦しい生活をしたため、「子供には手に職を」つけさせてなくてはならない、と考えていた¹⁸。

伊那の上郷

政熙の郷里である伊那地方、そして上郷村はどのような土地だったのだろうか。

上郷を含むこの地域は古くから伊那谷と呼ばれる。東には伊那山脈が、西には木曾山脈がそびえているが、谷というイメージとは裏腹に、飯田市の周辺には平野がひろがっており、飯田のもっとも幅のひろいところでは東西十六キロを計る。

天竜川の両側には河岸段丘がひろがっている。政熙の生まれた上郷村は伊那谷の南、天竜川の西に位置し、この地域の中心都市飯田の郊外にあたる農村地帯である。江戸時代は堀氏二万石の領域で、上黒田・下黒田・飯沼・南条・別府の五村があった。明治二十二年（一八八九）の市町村制施行によって上郷村として成立。昭和四十五年（一九七〇）から上郷町となり、平成五年（一九九三）に飯田市と合併し、その市

13 横浜市総務局市史編集室編『横浜市史Ⅱ 資料編2 地方小作官と農村情勢』横浜市、一九九〇年

14 横浜市総務局市史編集室編『横浜市史Ⅱ 資料編3 占領期の地方行政』横浜市、一九九三年

15 井上弘「日中戦争下の青年——足柄下郡早川村の一青年の日記より」『小田原市郷土文化館研究報告』二九号、一九九三年

16 井上弘「神奈川県小田原の一青年の日記よりみた戦時下の民衆——小長谷三郎の戦中——」『小田原地方史研究』第一二号、一九八二年

17 井上弘「神奈川県小田原の一青年の日記よりみた占領下の民衆——小長谷三郎と戦後民主主義——」『小田原地方史研究』第一三三号、一九八四年

18 「(戦前・戦後感慨ノート)」(4—その他5-1-7)

域の一部となった。戦後は商工業化と宅地化が進み、飯田のベッドタウンともなっている¹⁹。政熙の育った上郷村南条は段丘のなかでも天竜川に近い一帯、丘上の飯田からは東に見下ろすような位置にあった。

伊那谷の四季

伊那谷で政熙はどのような少年時代を過ごしたのだろうか。

本稿はおもに横浜の都市生活を復元することを目的とするが、その前提として政熙の郷里における生活を描出することも意味のないことではないだろう。政熙は伊那の農村地域の生まれだが、だからこそ横浜の都市生活の諸相を新奇的な目で生き生きと日記と描き出したふしがある。政熙は故郷上郷で過ごした最後の一年（上郷高等小学校一年時、横浜に出る前年の昭和四年）の生活風景をのちに回想してノートに書き付けている。この文章は横浜の都市生活と好対照をなす政熙の幼きころの生活ぶりをうかがうことができるとともに、昭和初期の伊那の庶民生活資料としても興味深い内容を含んでいる。原文は少々錯綜して文意の採りにくい部分もあったので、ここでは政熙の原文を生かしつつも読みやすいように一部整序・省略・項目立てをおこなって紹介したい。

○〔高等科へ進学〕

「仰げは尊し我が師の恩」と涙を浮べて歌い、六年尋常科の卒業証書・記念写真をいただいた。ある者は上級の学校へ進学する喜びを抱き、あるいは社会へ乗り出した者もいた。政熙も社会に出る予定であったが、「何とかして高等科へ入りたい」との向学心に燃えて、「忙しい時には学校を休んで手伝ふから」との条件をつけて、祖母にもたのんでやっと許しを得て尋常高等小学校に進んだ。喜び勇んで教科書を買ったあの

時の気持は今でも忘れることができない。「高一忠級」に初登校して、また勉強ができるのが何よりもうれしく、家の掃除等を片付けて登校した。学科では国語読本で同級生同志で指名して、質問したり答えたりするのが大好きであった。

○〔四月・南条八幡の祭礼〕

家に帰ると、畠の虫とり、草かき、弟妹の子守が待っていた。

四月十日は南条八幡様のお祭りである。よい着物を着てお小遣い五銭か十銭もらって出かけた。式がはじまると、神主は祝詞をあげる。式が済むと菓子をもらって帰る。午後からは囃子、獅子舞があった。お宮からは飾り、獅子花を競って取って帰る。

この季節は天長節、春の遠足、植林もたのしみな行事だった。

○〔春蚕〕

桑ものび春蚕も次第に忙しくなってくる。高等科からは農業の「学科実習」が行われた。秋になれば「収穫祝」をする。学校で教わったことは一通り家の畑作業でもやった。トマト・キュウリは特に自分の「領地」を決めて栽培した。蚕糞をやって成長を楽しんだ。

蚕も四眠を過ぎると忙しくなる。株の元から桑を切ってきて「スルへ」と葉をこいてお蚕様に進ぜる」。こうしてどんどん桑が切られていくと、家の前後が広々としてくる。「つなみ」をとって食べたり、ふところへ入れてシャツをよごして叱られたこともあった。「猫の手も借りたい上族〔族〕」を過ぎると、今度はまゆかきがはじまる。一枚かくと一銭ずつもらえするという約束で「もう何枚だ」と言ってこの作業を楽しんだ。

蚕の成績がよい時にはお小遣いをもらった

19 上郷史編集委員会編『上郷史』上郷史刊行会、一九七八年

が、不成績の時には一銭ももらえないこともあった。一生懸命働いても五十銭そこそこであったがそれでも大喜びで、欲しいと思ったものを買って、大部分は貯金してそれがふえるのが楽しみだった。

○〔麦刈〕

蚕が済むと麦刈りである。今までは「子供は邪魔だ」「はしかくなる」と言われて追い出されていたが、「コイノにもう引をこしらへてもらって、天晴れ一人前の様な顔をして」麦刈りに出掛けた。はぎへ麦を掛ける。天気の良い時を見計らって麦こきをする。大人に加わったのがうれしくて、弟・妹を追いまわして父の休んでいる間脱穀機を廻すが、なかなか思うようにはこけない。そのうち疲れてしまつて笑われた。

夕方になれば風呂桶に水を汲んで火をたきつける。表の道の真中の野天風呂である。近所の人を呼んで来るのが政熙の役目だ。麦がかますに入れられる。こうして半年の労苦が実を結んで、豊作とか不作とか話しながら片付ける。風呂がわいて父が入り、その次に政熙も「おれも働いた」と言わんばかりに入った。

○〔田植と草かき〕

麦刈が済むと田植がはじまる。今日は下田、明日はつぼの尻、次は松の木田と、次第に片付けられる田のあぜへ豆を蒔く。夜になれば蛍をとって楽しんだ。

一学期の試験の点を見てひそかに喜びつつ、「夏中休暇」がはじまる。宿題は朝のうちに片付けて、草かきに出かける。畠にも屋敷、松の木田、つぼの尻の畑、洞の畑、原の畑などの名がついている。政熙は洞の畑、原の畑へ草かきに行くことを好んだ。人里はなれた山の上の広々とした畑へ行くと、飯田方面の自動車の音、何か売声がきこえて来て他国へでも行った感じがした。原の畑には百合の花が咲いていた。

草かきを済まして山道を帰る時にはかぶと虫

をつかまえて競走させたり、喧嘩をさせて兄弟で遊んだ。山まゆをとってきて青いまゆをつくらせて喜んだこともあった。

○〔天竜川、七夕〕

暇があれば友達を誘って天竜川へ泳ぎにゆく。キュウリ畑へまわって、一つもぎ取って手ぬぐいに包んで、友達を呼んで天竜川へ行く。水は清く青々として激流にしぶきを立てて流れている。川で泳ぎ、渡し舟のあいだで遊んで、キュウリをかじりながら帰る。

子供の喜ぶ七夕祭が来る。早く起きてさといものつゆを集めて、色とりどりの紙に、「天の川あふぎの風にきりはれて空すみ渡るかさゝぎの橋」などと書いて机 升、すがり等を洗って供える。はじめてとる初なりのかぼちゃや野菜を供える。夜は提灯をつけたり花火をしたり線香をたいて遊んだ。

○〔お盆、秋〕

夏蚕を片付け家が広々となるとお盆だ。お墓の掃除に行き、仏様を飾る。赤い大きな木魚をたたいて、よい着物を着る。親戚に使いにいくと、ご馳走になって帰りに「おだちん」をくれた。十六日には沢へ仏様を送っていく。供えてあったものをくれるのでうれしい。

お盆が過ぎると涼しくなる。秋蚕の準備に取りかかる。暑中休暇も終わりになる。まっくろな顔をして登校して楽しい学科がはじまる。

○〔秋蚕〕

そのうちに秋蚕が忙しくなる。両手の指へ桑つみをはめて元の方から一枚一枚つんでいく。六株つんだら一銭お小遣いをもらうと約束してつんでいく。喰のびになる桑をつむ。早く桑をつんで、釘棒をさして洗う。張り板を横にしてむしろをひいて高い床をこしらえる。寝ていても見えるのをわざわざ床をこしらえて騒いで遊ぶのが楽しみなのである。

○〔秋祭り、修学旅行〕

秋蚕のまゆかきが済むと、また家が広々となる。すると秋祭りが来る。秋には別に何も催しはないが、夜はお宮から関まで提灯がつけられる。そこをかけまわって遊ぶ。十月一日には式がある。

秋には修学旅行がある。貯金をおろしたり、足してもらったりして喜び勇んで出かけた。伊勢皇大神宮の遷宮の年で、古いお宮と新しいお宮を拝んできた。二見で写真を撮った。奈良の若草山で鹿に追いかけて、雨の中逃げてすべってズボンを真黒にした。

○〔稲刈り〕

稲がぎっしり実って黄金の波が立つころ、「努鏡」が、お燈明が、おねんぶつが廻ってくる。廻文がひっきりなしに廻ってきた。こうして忙しく稲刈りがはじまる。元からさくさくと心地よく刈られていく。いなごが飛び立ち、赤蛙をつかまえる。稲はぎをつくって掛ける。乾いたところから稲こきがはじまる。脱穀機の音があちの田からもこっちの田からも聞こえてくる。たんばへお茶・重箱につめたさつまいもを、あぜに腰を掛けて晴れた青空をあおいで御馳走を食べる。かますに入れて家へ運び、干して天井から縄をつるして白ひきがはじまる。父と二人で押したり引いたりするたびに白は廻り、もみをぬいた米がおちる。それをとうみ〔唐箕〕にかけてからを飛ばす。それを「万石」に二度かけると新しいお米ができあがる。俵につめて今年の豊年を喜びあった。年貢を納めると生活の「たて」となるのだ。この並々ならぬ労苦に対しても一粒たりとも粗末にはできない。

これが済むと北風の中で麦蒔きがおこなわれる。村では品評会があり、大豆二等、米三等となり、賞状とバケツをもらつたこともあった。

○〔冬、歳末〕

伊那の山々が紅葉して雪が見えるようになる

と、寒い北風がひゅうひゅうと障子の破れ目を鳴らし、年末がくる。障子を張り替えて、餅をつく音が朝早くからあっちでもこっちでも聞えてくる。火を炊いて父がつく。母がこねる。弟・妹はそばででき上るのを楽しみに待っていると、湯気の立ったのを取り上げる。お供えをつくる。あとで黄名粉をつけたりあんをつけたりしてたべるのが嬉しい。父が苦もなくつくので自分もついてみたいくしょうがないのでやってみると、足がひょろひょろしてしてつけないうちに疲れてしまい、大笑いされた。豆餅もつく。こうして幾白もの餅をつき上げる。

父はお正月の飾おやすを作り、門松をたててくれると兄弟は大喜び。できたおやすをこれは何々の神様と言って配る。母はお年取りの御馳走を煮る。新しい下駄を見せてもらって大喜びでかけ廻る。「早く寝ろ」と言われてもなかなか寝つかれない。こうして除夜の鐘をこたつをかこんで床の中で聞く。伊那の谷の隅々まで響き渡る。

○〔元旦〕

白々と明けそめたころ、だれかお宮詣りに出かけるのか、凍った道をカランコロンと下駄の音がして、話し声がするともう寝てはいられない。戸をあけてお詣りに行く。帰るころには福茶、歯がための柿、豆が出る。父が神様に供えてお燈明をあげる。正月は子供の世界だ。新年おめでとうございますと言って、まっ先に柿を御馳走になる。こうしているうちに、お雑煮のにおいがぶんぶんしてきて呼ばれる。一家揃ってお雑煮を祝う。自分が横浜へ来てからは自分の分も蔭膳を据えて下さったと聞いてありがたく思った。新しい着物、紋付、袴を着せられて拝賀式に行く。済むとみかんをくれる。持って帰り父母に見せて皆で分け合って食べた。

祖母様のところへ年始に行く。お年玉をめいめいに下さる。年始廻りの使いに行く。御馳走と御年玉をいただいて帰る。待ちかまえていた

兄弟揃って矢作田〔親戚〕へ御年始に行く。色々御馳走をいただいて後「ドレ御年玉をやらにやあ」と言って、めいめいお年玉をもらった。かるたや双六をして遊び夕方帰った。いただいたお金は大部分貯金した。つかれているので早く寝てよい夢を見る。

父はかごをしょって買い初めに出かける。目がさめる頃には枕もとに日頃欲しいと思うものが置いてあって大喜びで皆起こして喜びあう。近所の子供を呼んだり呼ばれたりして遊ぶ。

○〔ボンヤリ、小正月〕

たのしい正月もすぎ六日にはおやすを集めてボンヤリを作る。むしろ、釘棒、炭を集め寄附をつのって御神木を入れてだんだん高くつみ上げて松をさす。上へは幣束をたてる。そのそばへ小屋をつくって一晩番をする。土手へ火をつけて消防隊だと言って後から消してまわる。昔はよその方へ喧嘩に行ったりしたという。自分は横浜へ来ることになっていたの、泊るのを禁じられ蔭居〔隠居〕で泊って早朝行つた。「ホーホーホーホー ホンヤリホーホー」と叫ぶとその声を聞いて人々が餅を持つて集つてきて火をつける。パンパンと心地よく竹の割れる音がする。幣束へ火がつくと歓声をあげる。この火で餅を焼いてたべると風邪をひかないとか言って、真黒に焼けた餅をたべる。あとを片付けて御神木を売って米を持ち寄り、どこかへ宿をたのんで一日たのしく遊ぶ。

小正月には餅花を飾り、まゆ、こぼん、鳥の形をこしらえる。豊作を祈るらしい。木を割つて十二月と書いて配ったのは何のためか分からない²⁰。

政熙は昭和五年一月二十日に横浜に出たため、伊那の一年の回想はここで終わる。

政熙、横浜へ

政熙は昭和五年一月に郷里から横浜に出て、時計店に奉公することになる。

政熙はどのような経緯で横浜の時計店に奉公することになったのだろうか。政熙の弟で現在岩手県滝沢市に居住する下平忠孝氏（昭和二年生）は次のように記憶されている。

私が聞くとところでは当時の伊那谷は養蚕が駄目になり、各村の製糸工場も落ち込んでいたそうです。喜逸叔父（政熙の父準太郎の弟）は上司にまじめな性格を買われて製糸工場の倉庫係となり、米国向けに輸出する生糸を横浜港へ送り届ける仕事をしていました。そのうち同郷の山吹村（現高森町山吹）出身の谷崎時計店の主人と知り合いになり、その手づるで政熙兄を小僧にお預けしたと聞きました。

父準太郎は政熙兄が尋常小学校六年を卒業すると、子供の将来を飯田の箕瀬のコウボウ様（占師）に占ってもらいました。するとこの子は金属関係の仕事が向いていると言われ、小僧に出し技術をみがいて腕に職を持つより方法がないということで時計店の修業に出したのです。父準太郎は兄には貯金をして店を持ち一人前の商人になることを願っていたようです²¹。

一九二〇年代からレーヨンがアメリカ市場で需要を拡大していく。日本の生糸輸出額の九十六％がアメリカ向けだった（昭和元年）から、レーヨンのアメリカにおける伸張は日本の蚕糸業に大きい影響をあたえる。さらに昭和四年秋にアメリカではじまった恐慌が世界に波及しつつあり、日本の生糸輸出は大きい打撃を受けた。上郷を含む伊那地方は養蚕が盛んであつ

20 「(戦前・戦後感慨ノート)」(4—その他5-1-7)。「高等科の一ケ年」(昭和十八年九月二十日)。

21 平成二十七年五月の下平忠孝氏よりの聞き取り、および下平修嗣氏からの教示をもとに吉崎が編集した。

たため、こういった世界情勢の影響を強く受けることになるが、忠孝氏の証言はこのような状況を裏付けている。

また、忠孝氏の証言から、政熙以前に親族が横浜に出ていたことがわかる。生糸の産地伊那と生糸輸出港の横浜は幕末期から生糸を通じて太いつながりがあった。政熙が横浜に出てきた背景には、両地域の歴史的な交流があったのである。

政熙自身は後年（昭和十八年）、横浜の時計店の主人が上郷の家に来たときのことを、次のように振り返っている。

或る日家の前へ一台の自動車が停つた。叔父様と主人が来られた。呼ばれて挨拶をした。年〔季〕が明けるまで家へ帰らないで務められるかと云はれた様に思つた。この時どんな事があらうとも帰らないと心の中に誓つて実行した。父と主人は煙草を吸つて話をして居られたが土産を置いて御帰になつた²²

政熙は尋常高等小学校を退学し、祖母につれて初めて床屋へいき、祖父からは礼儀作法をいくつか教わった。「故郷をはなれる時は淋しいと云ふが、まだ子供で好きな汽車にのつて美しい都会を胸にゑがいて居たのでかなしいとも思はなかつた」。しかし母は「お産の後で何もしてやれなかつた」と言つて泣いて祖母になだめられていた。紺色の風呂敷を持って「黒いマントにアゲをしたのを着て家をあとにした」。父に連れられて伊那電に乗った。「父と電車にのつたのも初めてであつた」。「山吹の御宅」（谷崎時計店の主人の家か）で二、三日「御厄介」になり、夜行で二等車にのり横浜さして郷里をあとにした。

2 時計店の生活誌

日記をつけるきっかけ

政熙の人生は、横浜に到着した昭和五年一月二十日からほぼ毎日追うことができる。それは、この日付けから日記がはじまるからだ。実は昭和五年の「日記」は二冊ある。ひとつは布張りのメモ帳で、表紙に「Notebook」と刺繍があるものである。店の規則、仕事で注意されたこと、故郷への手紙の下書き、もらったもののリスト、住所録など、さまざまなメモが備忘的に書かれている（以下Aとする）。しかし、一頁目には「昭和五年一月二十日 午前八時横浜の谷崎時計店へ着いた」と記され、その後も日付を入れて日々の出来事を記してゐる箇所もあるから、日記の性質も含まれている。

もう一冊は、「自由日記」と表紙に印刷された昭和五年版の市販の日記帳（改善社発行、以下B）である。空欄の月日欄と日記記載欄が印刷され、政熙が横浜へ来た昭和五年一月二十日の日付から毎日、日々の出来事をつづっている。

Bの昭和五年二月十九日条に「夜宮脇茂雄さんに絵葉書を見せてもらひ、状袋と日記帖をいただいた」という記述がある。宮脇茂雄は谷崎時計店の兄弟子である。この宮脇からもらった「日記帖」がおそらくBであろう。つまり、それまでAで備忘的につけていたさまざまなメモのうち、「日記」的な記述が兄弟子からもらった市販の日記帳Bにまとめられるようになったのである。そして、Bの一月二十日から二月十八日までの日々の記録はおそらくAのメモと記憶をもとにして、二月十九日以降につけられたものと推測される。そのせいか、Bの最初の一ヶ月間には記載のない日があるし、記述が淡泊な部分もある（二月十九日以降に記載のない日はない）。

22 「(戦前・戦后感概ノート)」(4—その他 5-1-7)。「高等科の一ケ年」(昭和十八年九月二十日)

さて、Aをあらためて見ると二頁目に、「出発前日はいろ／＼お世話になりましたが無事につきました。どうぞ御安心下さい」と、手紙の下書きの文章がある。さらに、「手紙のたね」あるいは「手紙の種」として「皆でなくさめてくれる」「ラヂオのこと」「夜十時半か十一時半頃休む」「二十日の休日こと」「石けんいただいたこと」などと、日々の出来事を箇条書きしている部分がある。つまり、政熙は故郷への手紙を書く「ネタ帳」としても、もともとAを活用していたようだ。そして、その「手紙の種」は横浜の時計店における日々の暮らしにまつわる事柄であったため、Aは必然的に「日記」としての性質をも帯びるようになったのである。ひとに手紙で出来事を伝えるためには、具体的にわかりやすく事実を記さなくてはならないだろう。政熙日記がときに臨場感豊かに細部の描写をしているのは、手紙でひとに伝える、という目的のためではないだろうか。

横浜に到着して

さて、あらためて、日記から政熙の生活をたどってみよう。

昭和五年一月二十日、下平政熙は横浜の谷崎時計店に到着した。政熙は自己紹介をしたのち、庭の掃除をして、先輩と一緒に生麦に「商」にいき、山手に修繕した時計を返しにいつている。

店に入り詔かい〔紹介〕して裏の庭のそうちをする。後徳田さんと一しよに生麦駅へ商に行き山手の方へ時計をかへしに行く。(昭和五年一月二十日)

翌一月二十一日、政熙は店の「規則」を教わっている。

店のきそく

一、客が入つて来れば「いらっしやいまし」と云ふ

一、もし客が上った時にはすぐげたをそろへておく。又茶を出す

一、返事ははつきり大きいこえで

一、主人のめいれいをきく時はすわって話をきくこと

一、家にゐると同じやうに主人を親と思ってゐること〔×を3つ記し抹消される〕

一、分らぬことがあれば兄弟子に聞く

一、きまりよくめいれいにしたがってそうじをすること

一、だん／＼この話になほすこと

政熙の仕事は、まず谷崎家の子供のお守り、家の掃除、客へのお茶出しなど、家・店の雑用であった。「起床後そうじをして、着物を着かへ顔を洗ひ、お子さんをおぶって坂下橋を渡り、八幡橋の方へまわって海岸まで行ったがあひにく曇つてゐた。夜おふろに入り後寝床」(一月二十二日)、「午前六時起床。着物をきかへてふとんをたたみそうちをする。僕は庭をはいた。外は雲〔雪〕三寸ぐらゐつもつて寒いが家の中は極めて暖である。そうちの次はおふろの湯でぞうきんをかけた。それがすんで次ハぞうきんを火ばち及び茶だんすをふいた。御飯を頂いて之後お客様にお茶を出した」(二月六日)。

時計店の仕事

政熙は谷崎家の雑用をこなすのと同時に、時計修繕の基本も少しずつ身につけていく。一月二十六日、政熙は時計の外し方・磨き方を教わった。「時計の外し方及び磨き方ををしへて頂いた。ふちを磨くには一番先に磨き、砂でこすりかわかして、アモアーでこすり新聞紙でふき、ハンカチでふき後にニスをぬつた。」(一月二十六日)、「時計の中の機械を外してきはつ〔揮発油〕であらつて組立てる。一番先〔最初〕は少しも分らなかつたが二度目からはだん／＼分り、三度目には車をどこへ入れるかぐらゐは分つた」(二月二日)。「今日はじめて置時計の機

械の組立てかたを教へて頂いた」(三月十九日)

時計店の業務は店内における時計の修繕のほか、得意先への出張販売、御用聞きも重要な業務であった。政熙は当初、主人・兄弟子に同行して得意先をまわっている。「御飯を頂いた後徳田さんと電車で地藏坂及び山手署へ商売に行つた。睦橋からよく富士山が見えた。地藏坂で時計の磨くのをあづかり十一時半帰る」(二月七日)、「戸部及び税関へ商売に行くのについて行つた。主人と一しよに行く」(二月八日)。

得意先での行動の内容を見てみると、時計のみならずさまざまな商品を売り、また修理していることもわかる。「久保町のお客様の家へ蓄音器を届け」(六月十四日)、「指輪の太さなほしする」(八月二十七日)、「腕時計及びバンドを売つて来てメガネをそろへ」(九月二十日)、「中央電話局及び小林へよって来た。電話機取替る」(昭和六年二月二十七日)、「ビクターポータブル[ポータブル]の磨きを一ヶ仕上げて」(昭和九年十二月八日)、「滝頭へ行きタイムレコーダ直しかへり」(昭和十年十二月二日)。

現在でもそうだが時計店では時計のほか、メガネ、指輪などの宝飾品、蓄音器などの商品を取り扱う。谷崎時計店でも時計以外の商品も幅広く販売し、また修繕技術を生かして、時計のみならずさまざまな修理作業をおこなっていた。

政熙の一日

谷崎時計店における政熙の一日はどのようなものだったのだろうか。

この点については意外と日記から見出しにくい。日々の当たり前の生活風景を事細かく日記に叙述しないからである。そこで、少し後年(昭和十一～十二年)の記述にはなるが、政熙が時計店での一日を「作文」としてまとめているので、その記述を紹介する。

【作文課題】私の一日

カチへーと急〔忙〕がしい音をたて、沢山の時計が元気よく動いてゐる店の中で、仕事台に向つて大小、時計の修繕に、私は務めて居ります。

午前六時には跳起き店の掃除を済せ、御飯を頂き仕事場に就き台の上でピンセット・ヤットコ・捻廻し等を操つて修繕技術の研究に精を出し、又御客様に接しては親切に、早商講にて学んだ事が直ちに活用出来て益々趣味を以て進む事が出来る。時々官署、会社の御得意様へ出張販売に出掛け御用を承って帰り、又修繕に取掛る。難かしい機械がやっと動かす事の出来た時の喜びは仕事に当つた者のみが味はう事の出来〔脱力〕趣である。次から次へと出来上つた時計が爽やかなセコンドの響をたて、進む時、我々若人が無限の希望に然〔燃〕えて心強く躍進日本を目ざして進むのと何等変りは無いのである、午後十時には店を締め風呂に入つて汗を流してすがへーしい気分になり侍〔待〕つてゐた早商講を静かに開いて勉強に取掛る一、二時間。少い時間ではあるが私にとつては此の上もない楽しみである²³。

ここに叙述されるように、政熙は午前六時頃に起床し、店を掃除して朝食をとる。時計の修繕をおこない、得意先をまわって出張販売をおこなったり、修繕の仕事を請けることもあった。店を閉めるのは午後十時で、その後が自由時間であった。以上が政熙の典型的な一日であったようである。

谷崎時計店について

政熙が入店した谷崎時計店について、政熙が入店した当時の店主・谷崎千久次の四女であるアリガ・キミコ(紀美子)氏(昭和四年生まれ)、

23 早稲田大学商業科校外生(早商講)の作文課題。年代はないが昭和十一年～十二年頃と推定できる。(3-クリアファイル1)

三女相子氏のご子息渥美紳一氏から平成二十七年六月にうかがったお話等をもとに紹介しておこう。

千久次は長野県伊那地方の出身（前述したが下平忠孝氏によれば現高森町出身）で横浜に出て生糸検査所で「サラリーマン」をしていたという。大正十二年（一九二三）の関東大震災後、まつと結婚する。まつは信州下高井郡中野町（現中野市）の出身で、最初横浜の地藏坂で時計店を営んでいた谷崎氏と結婚する。しかし、この最初の夫は関東大震災で死去、その後警察署長からすすめられて千久次と再婚したという。つまり、千久次は谷崎家に婿として入ったことになる。

まつはなかなかのやり手で、当時珍しかった月賦販売なども採り入れて店は繁昌した。まつは結婚前、東京のお婆の家に下宿していたのだが、その時代にのちに横浜市長となる青木周三と知り合いになったという。青木周三は明治八年（一八七五）生まれ、逓信省、鉄道院で経歴を積み重ねた山口県出身の官僚だが、横浜市電気局長、横浜市助役などをへて、昭和十年から十六年まで横浜市長をつとめた人物である。谷崎時計店が横浜の官公署をおもな得意先とした背景には、まつと青木周三とのコネクションも作用したかもしれない。

谷崎時計店の家族と店員の構成については昭和七年の政熙日記末尾にメモがある。当時の「主人」は谷崎千久次（三十六才）、「お上様」まつ（四十六才）、子供は二十二歳の長女をはじめ女四人、男一人。その他、雇い人として、十四歳の女性（「女中としてお上様のいここに当る人」）、店員は十九歳の奥田季彦（「当店のしん類の人」）、十六歳の宮沢銀一（「上伊那上片相より来たる人」）、そしてこの年（昭和七年）十五歳になる政熙の三人であった。

得意先

ここでは日記から谷崎時計店の得意先を概観してみよう。

得意先として記述が多いのは横浜市・神奈川県内の警察署である。昭和五年七月三日、政熙は主人のカバン持ちをして戸部警察署へ「商売」に出掛ける。十二月三十一日には「エンブレソブカナダと云ふ外国の船の中の久原様と云ふ巡査」にメガネの部品を販売。昭和六年一月三十日には「主人と巡査教習所から伊勢佐木署から東電へ掛時計を持つて行」く。同二月二十三日には「伊勢佐木署の與野警部様の所へ蓄音器のなほしをあづか」るなど、市内の警察署に赴いている記述が散見される。

のみならず、県内の警察署にも谷崎時計店は精力的に営業活動をおこなっていた。昭和十年一月二十五日、政熙は「小田原署に商に行く。途中下車して平塚署へ行ったが武道はじめらしくだめですすぐ小田原へいった」。二月二十五日、政熙は横須賀署へ商いに出張。鎌倉署へもいき、目覚まし時計、メガネ、懐中時計、皮などを売った。四月二十五日には戸塚警察署を訪れ、五月二十四日には川崎署に営業。翌二十五日には「切付〔切符〕を買ひて横浜線フチノベ〔淵野辺〕より上溝署へ商に」行った。六月二十五日には「横須賀署へ商に行く。何も一つも売れないのでくさって仕舞った。桑畑様よりたのまれものを預り鎌倉署へ行く。大勢居て武道に余念なくけいこしてゐた。八木様に一ケ二十二円のクローム 16 モリス売」った。

このように、横浜の郊外の一時計店が県内の警察署に食い込めた背景には、先述したようにまつと青木周三のコネクションも大きかったようだが、そのほか、谷崎時計店からも遠くない「巡査教習所」を頻繁に訪れていたことも関係しているようだ。巡査教習所とは、戦前期の警視庁や府県警察部に設置された巡査養成機関である。昭和戦前期には現在の横浜市区南村町に神奈川県の巡査教習所が所在した。巡査教習

所を出た警察官は神奈川県内諸所の警察署に配属される。谷崎時計店の営業にあたっては、巡查教習所で縁をつかった警察官を訪ねて県下の警察署を営業するということがあったようだ。

たとえば、昭和九年六月二日、政熙は巡查教習所について「卒業生の配置」を聞いて帰ってきた。昭和十年四月二十五日、政熙は戸塚警察署に商売にいったとき、「練習所を出たばかりの知人の客が居た。なつかしかつた」と記し、さらに同年五月二十四日、川崎署において「練習所にて商した時のお客様が今では立派な警官となつて久しぶりで御合ひした人が数名居た」と書いている。巡查教習所時代に警官と縁をつかったことが、県下の警察署への営業にあたって有利に働いていたことが想像できる。

警察同様、谷崎時計店が頻繁に営業した先に「刑務所」がある。神奈川県監獄署は当初戸部にあったが、明治三十二年（一八九九）二月、根岸村字広池に移転してくる。関東大震災で大きな被害を受けて昭和十一年六月、中区笹下町（現港南区）に横浜刑務所として竣工、移転した。昭和十一年に移転するまでの刑務所の位置は谷崎時計店から近かった。そのほか、消防署、市電関係機関（滝頭車庫、生麦車庫など）、生糸検査所、横浜税関、（中央）電話局、衛生試験所、焼却場、家畜検疫所といった市内の公的機関が日記から見いだせる。また民間企業でも、東電、東洋バブコック、横浜シネマ、富士バス、東京搾油、伊豆庄といった名が見える。むろん個人の客も持っていたが、谷崎時計店は公的機関との結びつきによって商いを維持・成長させていたようである。

根岸——谷崎時計店の立地

谷崎時計店の所在した磯子区西根岸町は堀割川が根岸湾に注ぐ河口付近に位置する。横浜の中心部・関内からは南に三・五キロほど離れており、昭和はじめにはすでに住宅街が形成されていた。しかし、堀割川よりさらに南にいく

と、農地が多く残っており、昭和初期のこの地域は都市横浜の外縁部であった。明治三年（一八七〇）に掘削された堀割川と同四十五年（一八八〇）に八幡橋まで延伸した市電によって、この地域は関内と密接にむすばれており、周辺には横浜の都市生活を支える特色ある施設が点在している。

たとえば、昭和四年九月に横浜市初のゴミの焼却施設として稼働を開始した滝頭塵芥焼却場は堀割川河口の埋立地に位置する。その付近には家畜検疫所もあり、政熙も時計の修繕の注文をとっている（昭和九年九月二十二日）。得意先の節で述べたように横浜市電の滝頭車庫もほど近く、谷崎時計店がよく出入りする巡查教習所・刑務所も付近にあった。

この地域は都市横浜の中枢部ではないが、横浜の都市機能の一端を担う公的機関が多く所在していた。その存在が谷崎時計店がこの地に店を開いた理由であったかもしれない。

3 モダン都市横浜

横浜中心部を「観光」

政熙の休日（公休日）は入店当時月一回で、おおよそ毎月二十日前後に設定されていた。政熙は休日に横浜の中心部にしばしば足を運び、昭和初期の街のさまざまな様相を日記に描写している。

昭和五年二月二十日、政熙は初めての「横浜観光」に出かけた。

今日七時起床。色々かたつけて十一時頃店を出て電車で三溪園へ行き、後東洋第一の人道さくらみちの約三丁位のトンネルをくぐり、横浜公園へ行き、後棧橋へ行き一時間ばかりたつて英国の船の出帆を見た。約二町ぐらゐの長さで三本煙突の船であった。そこを出て小林さんの所へ行き、常せつ館〔映画館〕へ入り野沢屋〔百貨店〕でエレベーター

にのつて下りた。話〔活〕動写真を見て高橋さん〔材料店〕へ行き、めがねやさんへ行つた。〔中略〕店で小使銭を六十二銭頂き少しも使はず。(昭和五年二月二十日)

同年五月二十日の公休日にも政熙は横浜の中心部へ向かう。

今日は定休日でお掃除をきれいにしてから御飯を頂き遊びに出かけ、伊勢佐木町まで歩いて相がみ屋〔相模屋・百貨店〕・野沢屋(百貨店)へ行き、十銭パンを買って昼食とした。パンを横浜公園でたべてから棧橋へ行き、大洋丸の出帆を見て横浜駅の方へ行き、野毛公園で震災記念館へ入らんとせしが、時すでにおそくまに合はなかったので公園で遊び、伊勢佐木町であそび、バナナを十銭買ふて食べた。九時頃帰り湯に入り十一時半寝床。お小使一円いただいた。(五月二十日)

横浜の街は大正十二年(一九二三)の関東大震災で壊滅状態となった。しかし、その後十年ほどの間に横浜はめざましい復興を遂げ、鉄筋コンクリート造りの建物が立ち並ぶ近代的な都市風景が現出した。ほぼ同時期に新しい文化と生活スタイルが都市部を中心に全国的に浸透しつつあったが、このように一九二〇～三〇年代の都市に見られた新しい生活文化・文化は同時代に「モダン」と呼ばれた。政熙の日記からは、「モダン都市」横浜のさまざまな娯楽を楽しんでいるようすもうかがえる。

映画と百貨店

モダン都市の娯楽の王座は映画(活動写真)だった。昭和六年、横浜市内には二十五の映画館があり、そのうちの九館は伊勢佐木町に集中している。政熙の日記からも伊勢佐木町で映画を見た記録が散見される。

昭和五年三月二十日、政熙は「常盤館〔常設

館か〕へ「進軍」の話〔活〕動写真を見た」と記しているが、これがおそらく政熙が横浜で映画をみた最初だろう。昭和六年には元旦から常設館で映画を楽しみ、二月二日には又楽館、四月十九日には横浜を代表する洋画封切り館・オデオン座にはいっている。昭和七年九月二十三日には「ほととぎす」「上陸第一歩」を鑑賞、昭和八年一月十五日には「オデオン座へゴリラの活動写真を見」ている。三月十六日には切符をもらって常設館へいき「島の娘」を、五月二十一日にはやはり常設館で「十九の春」をみる。昭和十年一月七日にはオデオン座で「アメリカ艦隊及クレオパトラ等」を見る。昭和十年二月十七日には、政熙はオデオン座の「特等」にはいって欧米人にまじって映画を鑑賞する。「オデオン座の特等へ入れて頂く。〔中略〕隣を見ても(外国人)英米人が大勢見てゐた。まっすぐ前に見えクツシヨンのよいこし掛へ一人で掛けた。活動で特等へ入つたのはこれが初めてである。(武俠一代、久遠の誓ひ、合点承知)等を一通り見て夕方帰つた」。

モダン都市の娯楽装置のもうひとつの代表格が百貨店(デパート)であった。大正末期から百貨店は小売業界のなかでも大きな位置を占めるようになる。横浜の百貨店は伊勢佐木町に多く所在したが、政熙も休みの日に伊勢佐木町の百貨店にいった記録がある。

昭和五年二月二十日、政熙は「野沢屋〔百貨店〕でエレベーターにのつて下りた」。野沢屋は明治四十三年(一九一〇)に伊勢佐木町一丁目に店舗を開設、昭和二年には五階建ての新館を建設し、横浜を代表する百貨店としての地位を確立していく。百貨店にはあらゆる商品が並べられたが、政熙は「エレベーター」に乗るだけでも十分楽しんだようである。

昭和五年十月二十日、政熙は「自転車で遊び早昼を頂き歩いて相模屋であそび松屋へ入つて見物を」した。相模屋は昭和四年に伊勢佐木町四丁目に近代的なデパートを建設、安売りで市

民をひきつける。

昭和六年には主人の娘たちと「伊勢ブラ」をして、デパートに寄る。「相子様とお友達と銀殿と皆で伊勢ブラに行きデパートを廻つて」(昭和六年一月三日)。昭和七年七月二十四日「夜は野沢屋食堂で御はんをたべ」た。昭和九年七月十五日、「徳田様の人と伊勢佐木町をブラへ歩いて常設館へ入りて夕方出てデパート見物してかへり」。ときには百貨店で催されている展覧会にはいり、「めづらしい物を色々と見物して」くることもあった(昭和九年九月二十三日)。

政熙は百貨店で買い物をするのはあまりなかったようである。しかし、百貨店はモダン都市の先端をゆく華やかな場所であり、政熙たち都市住民を引き寄せた。

小旅行

政熙は谷崎時計店の主人・店員たちと「小旅行」に出かける。また、時計商組合など関連する団体が小旅行を催すこともあった。ここでは、昭和初期の横浜近郊への小旅行のようすを日記から見てみよう。

昭和五年四月六日、政熙は「店の衆」と金沢八景に「湘南電車」で出かける。サイダーと菓子を食べ、絵葉書も買ってもらう。「金沢八景の一なるべん天様ですしをいただき、船にのり水をくみ出して、おとしてしまった。かへりには徳田さんと私は乗合自動車でかへつた」。

昭和六年五月三日には、多摩川園へ出かけている。多摩川園は現在の東京都大田区田園調布に大正十四年(一九二五)に開園した遊園地である。

「第三日曜とくりかへで金パイ酒の懸賞で多ま〔摩〕川園へ東横電車で行き、おもちゃの飛行機にのり、高い見張の一番上へ上り、又大山すべりをしたりして、初に福引をして石けんを、銀殿は傘で、おべんたう・サイダー二本ツツ頂き、一本のみも一つおみやげに持つて来た」。

昭和七年四月十三日には金沢八景へ出かける。「時計商組合のお花見で金沢文庫へ行きべんとうせんべい酒等を頂く。それから金沢八景へ行き、そこで解散して八景一べん天〔弁天〕様へ行き、それから横須賀へバスで行き、三笠艦を方々見物して市を少し歩き、又金沢八景までバスでかへり、ごんげん山〔権現山〕へ上りなどして夕方ソバをたべて」、店に帰った。

東京も観光の対象だった。昭和八年六月二十五日、政熙は「東京見物」に出かける。

三時起床。二人の兵隊さんを送り出し掃除をして御飯を頂き、九時頃より東京見物へ行く。省線横浜駅から東京駅へ下車して九〔丸〕ビルを通り、門から二重橋を拝み日比谷公園へ行きあそんで桜田門へも行き、参謀本部及司法、海軍、拓務等各大臣の官舎、警視庁等の大建築を見て市電で上野公園へ行く。中〔昼〕食をすまし寛永寺等をブラ付き動物園へ入る。そこを出て地下鉄で浅草へ行き観音様へ参拝し町を歩き活動館を通つて見、花屋敷へ入らず夕飯をすまして市電で銀座通を散歩してデパートへ上つて見た。バスで新橋より(九時二十八分)省線でかへる。

また、谷崎時計店では毎年のように三増峠に栗拾いにいっており、これを政熙は楽しみにしていた。たとえば、昭和九年十月九日、政熙は店の衆などと「自動車」で三増峠に行く。

三時起床。仕度を整へて御上様四人様と自動車で愛甲郡高峰村三増峠の御用林へ栗拾ひに行きました。先づ後藤様へよりてカン礼〔鑑札〕をつけて山へ入りました。僕はリユクサクをしょつて右へ左へ廻りて拾ひはじめた。去年より小粒であつて割合に少なかった。それでもリユクサクへーばいになった(五貫目位)。先づお昼におむすびを頂いた。何ともいへなくおいしかつた。けれどか

へりは大変山道をきよひ〔ママ〕、次から次へと沢を渡りぬかるみを通り十里ほど歩いた。身心綿の如くつかれた。畑へ出て里を見たがとてもとほいので又なれぬ人里見えぬ中ノ山道を大木の倒れたのをくぐりへやつと道が分つた時は一同歓呼の声をあげた。時夕暮六時後藤様より自動車でかへり湯に入り十一時寝床。

「ドライブ」を楽しんだ記録もある。昭和十年五月十九日、政熙は自動車で箱根に行く。

六時起床。掃除をすませて自動車で箱根及十国峠へドライブした。東海道松並木の間をアスファルトの所や他の道を三四十哩ぐらゐ出しながら行くのは何とも云へないよい気持であつた。馬入・酒ほ〔酒匂〕川の橋も通り小田原をすぎ湯本より上りはじめた。箱根の山は天下のけんとはよく云つたもので、とてもけはいは壮□な所が多かつた。宮ノ下で下りてあそび又大ワク小ワク谷及曾我兄弟の墓を見、つつじの満開を見ながら間もなくあしの湖〔芦ノ湖〕へついて写真うつす。箱根神社参拝してうねつた道をよい風景をながめながら十国峠下へつき、山を上つてお昼を頂いた。何と云へぬおいしかつた。それからしばらくすすと〔ママ〕まつしろにきりがかかつて来た。下へおりて車にのり専用道路を下りて熱海園の湯に入り大楠見てかへる。十一時寝床。

昭和初期、上流階級では自動車を個人所有し、休日に郊外へのドライブを楽しんでいた。いわゆる「モダン・ライフ」である。「モダン・ライフ」は一般庶民には縁遠いものと考えられているが、自動車を所有せずともこの場合のように自動車を借り切って郊外へ出かけることがあり、政熙のような時計店の奉公人も「モダン・ライフ」を享受していたのである。「モダン・

ライフ」は考えられている以上にこの時期の都市生活に浸透していたのかもしれない。

4 軍事の影

防空演習

政熙の日記からは、戦争・軍事の影が生活のなかに少しずつ入り込んでくるようすも見ることができる。

昭和六年の満州事変をきっかけとして軍は防空訓練を進めることになるが、民間における防空の中心的な組織が防護団であつた。横浜・川崎では昭和七年四月に横浜川崎非常変災要務規約が定められ、「非常・変災」時の防護体制が整えられる。この規約をもとに横浜市各区（鶴見、神奈川、中、保土ヶ谷、磯子）と川崎市を加えた六行政区に防護団が組織され、さらに各区では三〜十ほどの分団が設置された。磯子区では四つの分団が組織されたが、政熙は第一分団に所属する。

昭和七年九月一日、政熙は防空演習に参加した。「防護えん習す。飛行機よりばくだんをすとし〔ママ〕。これに高射砲及消防自動車飛ぶ。皆公園へ集る」。

昭和八年八月の関東防空演習は、従来以上に大規模に実施された。演習は八月九日から十一日までの三日間で、演習地域は東京・神奈川・埼玉・千葉・茨城と広範囲に及んだ。政熙もこの防空演習の様子を日記に書き留めている。

「防空演習は海軍飛行てい（ばくげき機）等が数回攻めて来て警報で知り横須賀で守る、攻めるで急に上つたり下つたりにげたり追つたりしたのが見えた。夜たんかい灯〔探照灯か〕二ツで照らし白く見えた」（昭和八年八月九日）。

翌日は仕事で使いに出た途中で訓練のようすを目にする。「古川電線へ使に行く。浜松町まで行く途中、防空の合図と共に車等は止められ、毒ガスをまきさい涙だんをきいた。いやなには

ひがして目から涙が出た。そこへ消防自動車、求〔救〕護班がかけ付けて（花火）はどんどん打つた。そして平沼瓦斯局は煙幕で一寸も見えなかつた」（昭和八年八月十日）。

昭和九年から防空演習は、東京・川崎・横浜の三市合同防空演習として実施される。この年の演習目標は灯火管制を成功させることで、政熙の日記にもそのようなすが記される。

「夕飯を頂き十二時寝床。第二回関東防空演習は雨天の中をいとはず着々と進行の途に上り、夜は非常管制（灯火管制）は数回行はれた」（昭和九年九月一日）。「京浜防空演習は暁の空襲はものすごかった。昨夜から非常管制は数回行はれた。当市の上空へも来た。照空灯は一生けんめいさがしたが、雲の中にて分らず。ばく音物すごく当市の大部分は（全滅）灯火は成積〔績〕よし」（昭和九年九月二日）。

昭和十年の三市合同防空演習は七月六日・七日である。

七月六日、「お昼を頂き仕度を整へて防空演習に出た。先づ各自つめ所へ集り各ガイトー〔街灯〕電気を消して廻つた。〔中略〕消火係となり活動した。四時頃、芝生□隊へ焼夷弾投下との報に接し応えんに出かけた。手にはバケツをにぎり、そして消した（毒瓦斯に倒れタンカにのせられた）。交番脇では大規模に行ふ焼夷弾催涙弾になやまされた（高時機械銃）。□ひあげて夕飯を浜一でたべて夜は十時頃根岸橋破カイで出動す。かへりてうつらへとすごし甘酒、センベイ、餅菓子出る」。翌日も防毒救護、催涙弾からの避難などの様子が描写される。訓練終了後、政熙は「記念品として湯呑、石けん、手ぬぐみ頂」いた。

昭和十一年六月二十一日、「お昼を頂き防空演習よ〔予〕行演習に参加してビン工場に集合」。姿勢・敬礼などを教わり、人員点呼して上町の原でバケツリレーをおこなう。七月五日、防護団の訓練に参加。「防毒及破かい弾投下で万一の場合にそなへてゐたが何事もなかつた。巡廻

に行つた人をさがしに行きラムネ二本頂く。整列して磯子署裏の埋立地で市長等の査閲」があった。

この年の防空演習は五日間にわたる長い訓練となった。初日の七月二十日、政熙は十時防護団へ出動。ビン工場跡に集合し、ランプのカバーを戸別に配布。昼食をとってから、防火班本部へ引揚げ、再度ビン工場へ集合する。「屋外灯の消灯に出動して廻りてかへり池田山へ集合して大和染工場脇へ毒瓦斯・焼夷弾投下してホースとバケツリレー消火につとめた」。

七月二十二日、「二時頃角店あたりへ焼夷、破壊、毒瓦斯投下との事にて出動し、用少くホースを以て消し止めたり。次いで四時頃坂下橋へ瓦斯弾投下中毒冠〔患〕者九名を救護班出動して助け、防毒班の活動を見学してゐると、丸山町模擬火災との報に接し、かけ足を以て延焼を防がんとし、尚七八名は当地分団に応援して大いに活動した」。

七月二十三日、「夕飯を頂き防護団に参加してビン工場集合詰所へ引揚げ非常管制二回に消灯を叫んで巡廻して夜食をたべては出掛けうとへしてゐると、又巡廻して差入のせんべいをたべては又出掛けた。一夜を巡廻ですごした」。

七月二十四日、「三時半集合。池田山へ集りて待機の姿勢にてゐた。命令一下天神橋附近へ瓦斯弾投下、破カイ弾続いて焼夷弾投下されて防火班の活動は開始された。大変にバケツの手送りがうまく行つた。丸山町の方でもやめてゐた。大砲は橋の上で発砲されてものすごい音がしてゐた。演習終了と共に古井商店倉庫へ焼夷、瓦斯弾投下されて共に目ざましく活動してビン工場引揚げ演習終了のあいさつ」があつて解散した。

出征風景

昭和九年頃になると、政熙は入営兵士の見送り風景を目にするようになる。

一月十九日、「今日はあつちでもこつちでも

と入営兵士の見送で、多いのになると六十本位の長旗をひるがへし、雪まじりの雨の中を楽隊の行進勇ましく行進するのもあれば、又淋しく送られるのもあるが皆御国に尽す心は同じである」。

昭和十年三月二十四日には、店員の奥田季彦が入営することになり、政熙たちは奥田を見送った。奥田は「万洲〔満州〕新京電信第三大隊」へ入る。

自動車で奥田様の宅へ行く。みかんおこわを御馳走になつて奥田季彦君の入営を送った。雨の中を元町のお宮へまいり桜木駅へ入り省線で横浜駅へ行き三時間程待った。同じく入営で同車にのったのも数名あつた。歓呼の声に送られて万歳三昌〔唱〕して固い握手をして送った。次第に列車はうごき出した。一同どつと万歳をさげびよろめいた。

昭和十一年五月には、政熙は第一師団が中国への「守備の任に就かれる軍人を使の途中で見送。小学生と共に万歳歓呼の声で国旗をひるがへして送った」。政熙は「いづれ我々にも送られる時が来るかア」と感慨を記した。

政熙の生活に、だんだん有事（戦争）の影が入り込みつつあったが、それは「モダン」な都市生活と共存していた。

5 昭和十年・十一年

入店五周年、若旦那

昭和十年一月十日、政熙は商友会定期第三回総会に出席し店員表彰状をもらった。おそらく満五年勤務の表彰であろう。「よばれた時の拍手をうけた気持は如何ア。表彰状ならびに賞品としてごうり〔草履〕一足頂く。会長の前へよばれて行き三步前で礼をし、うけて礼をし三步

かへって礼をした」。

一月二十日、政熙が谷崎時計店に来てから五年を迎えた。「本日は私来店満五ヶ年を迎えて昔の来店當時を思ひ出して見たり、又それ以来の事を考へながら」寒い一日を送った。政熙は毎年一月二十日を記念すべき日としてとらえ、来店當時のことを振り返ることが多かった。この年は店員表彰をうけたこともあり、感慨もひとしおであったようである。

昭和十年三月十六日、谷崎家の長女・鉦子が結婚した。相手は英雄という。結婚式は紅葉坂の紅葉閣でおこなわれ、政熙も新しい洋服を着用した。「新しい洋服を着用して色々の用事をしておこわ飯を頂いた」「奥では花嫁衣装をつけてお昼すぎ紅葉坂の紅葉閣の式場へ出かけた。お昼を頂き電話ありて円タクで行きてチツキをおろして持っにかへり」。

政熙の日記では以降「若旦那」と記される英雄は、もともと福島県の出身である。横須賀の時計屋で働いていたところ、その腕のよさを買われて谷崎家に婿入りした。戦後には根岸の丘にあったアイケルバーガーの家の時計も直したという²⁴。谷崎時計店としては優秀な技術者も確保したということになろう。

婚礼翌日の三月十七日には店の二階で酒宴があり、政熙はお祝いとしてシャツを若旦那からもらう。さらに十八日には若旦那の紹介が店員にもあり、政熙は金一円を受け取った。政熙はこの後、英雄を慕っていくようすが日記から読み取れる。

そして、政熙の職場の環境にさらなる変化があった。三月三十一日、政熙の同僚だった宮沢銀一が病気のため帰郷する。宮沢も郷里は伊那であった。「銀殿と机を同じくすることここに六年間で不幸にも銀殿は病となりて五十日間病院生活をして今日は故郷へ帰られる」。もうひとりの同僚の忠司もやはり病気となり、「宮沢

24 アリガ・キミコ（紀美子）氏。渥美紳一氏のお話による。

君がゐなくなり、忠司君も病となり、三人分を引受けて廻る急がしきは又特別つらい。しかしお上様方の慰めでつかれた体をはげましへやつてゐる」(昭和十一年五月十四日)。七月十五日、新たな店員が入店した。「寅、とら殿と云ふ十六才の小店員来る」。

復興博覧会

昭和十年(一九三五)三月二十六日、復興記念横浜大博覧会が山下公園を会場として開かれた。産業振興を目的とした一大博覧会で、二ヶ月間の会期中に三百万を越える人々を集めた。政熙は四月四日、「博覧会行のお小使頂いた」。日記末尾の出納録を見ると一月二十日に「博覧会前売券」として五十銭の支出があるので、かなり早い段階で前売券は入手していたようである。四月二十一日、政熙は店の同僚たちと「博覧会見物」に出かけた。「先づ近代化学〔ママ〕の珍しい機械館を見て本館へ入った。第二本館には上郷村出品の反物があつた。歴史館や其他海女の真珠採集、アメリカノサーカス(飛おりそこなつた)等や陸海軍館・水ぞく〔族〕館、台湾・朝鮮・シヤム・ブラジル・南洋・満洲館等かぞへきれない様に見た」。

昭和はじめの恐慌から景気は回復しつつあり、震災復興とあいまって横浜の街は「モダン」な雰囲気包まれていた。

二・二六事件

昭和十一年二月四日、午後より雪が降り出して、「つひに七八寸積つた」。吹雪のため往來の人たちは皆雪だらけとなつて、枯木も家もことごとく「銀世界」となり、家の前をスキーヤーが通りすぎていった。昭和はじめはスキーが流行、横浜の街頭でスキー場に出かけるスキーヤーの姿を見ることもあつた。翌日雪はすっかりやんだが、「一寸二分位」は積もつた。政熙は「雪かきをした後で大きな雪だるまをこしらへた」。夕方になってようやく電灯が点火して、

「電気の有難さをしみじみと感じた」。市内の電車・省線は各所に「えんこ」して動かなかつたという。

二月二十日、衆議院選挙の投票日である。「御主人と若主人は清き一票を入れた様子」。二十二日、政熙の故郷の上郷村よりも代議士が選ばれる。「上郷村より代議士を出した喜びにたへず」と政熙は日記に記した。

二月二十六日は雪。政熙は臨港署に集金に行く。「東京の事件のため入金せず外の用を足して生麦へ行く。大変なさわざであつた。記事差支止〔ママ〕故ははっきり分らぬが青年将校等が機関銃を以てこうげき〔攻撃〕し上記〔欄外に記した人名〕人死傷者出す。ラヂオ目茶苦茶となり三度臨時ニュースにて一部知るに致〔到〕つた」。日記の欄外には「青年将校等のため内田〔岡田〕主相〔首相〕、斎藤内府、渡辺教育総官〔総監〕の即死。牧野内府湯河原で不明。鈴木侍従長高橋蔵相負傷さる」とある。二・二六事件であつた。

ベルリンオリンピック

昭和十一年八月一日から十六日にかけて、第十一回オリンピック競技大会がベルリンでおこなわれた。このオリンピックはラジオで中継されて日本人も熱狂する。政熙も昭和十一年八月の「八月の感想」欄に、ラジオに「かじりついて」いたことを次のように記している。「近年にない珍しい暑さであつた。第十一回国際オリンピックが人気を呼び水泳日本、陸上日本と活躍〔躍〕をした。夜十一時から十二時迄朝六時半より七時までとラヂオの前にかじりついて聞いたり、号外は乱れ飛び盛大であつた」。

日記各日の欄外にも活躍した選手の情報が記されており、政熙が日々興味をもってオリンピックの中継を聴いていたことをうがわせる。八月七日には「田嶋原田三段とび一二等に入る。オリムピック」、八月九日には「オリムピック 水泳百米 一チツク 二遊佐 三新井

四田口」、八月十日「マラソン 孫一着 南三着」、八月十一日、「決勝か、(世界新) 八百リレー 第一着 遊佐新井田口杉浦 女二百平泳 前畑一着 飛込三着」、八月十五日、「二百米平泳 羽室一小池 3 伊藤 6 着 女子四百自由小島 6 着 千五百米自由一 寺田 三〇藤 四着 原田で興奮の中に水上は終了した」。

オリンピック後の九月八日にも政熙は「オリムピックの活動写真見に行」っており、興奮の余波は続いたようである。

徴兵検査の準備と歳末

昭和十一年十一月七日、政熙は満二十歳となる翌年に徴兵検査をひかえ、郷里の父から予備検査の書類が送られてきた。翌日の十一月八日、政熙は「田中医院へ行き診断書を頂いてもらつてかへる」。十一月九日、「診断書及手紙田舎へ出ス」。十一月十八日には、健康診断に身長の記事がなかったようで、「身長一、五九 m 五尺二寸八分 胸囲〇.七七.五 m 二尺五寸六分」という身長・胸囲を書き送っている。

昭和十一年十二月八日、政熙は買ってもらっ

た背広を試着した。「はじめて着たので皆に冷かされた。〔中略〕思へば星霜七年も夢の間につき去つてもう来年は徴兵検査となる様になった。相ちゃんはおかつぱで、四五年生くらゐで京ちゃん昭ちゃん乳首をしゃぶつてゐてお子守をしたり、紀美ちゃんはまだ立つ事も出来なかつたが、もう尋常二年生となつた。自分も礼儀一つ知らずにわがままを云つてすごした過去を思」った。

政熙が二十歳を迎える昭和十二年は、日本史にとっても政熙の人生にとってもひとつの節目となる。

<附記>

本日記の内容紹介にあたっては下平政熙氏の長男・下平修嗣氏より、ご理解ならびにさまざまなご助言をいただいた。心よりお礼を申し上げたい。

また、本日記の内容にかかわる様々な事実を教えていただいた下平忠孝氏、アリガ・キミコ(紀美子)氏、渥美紳一氏にも深くお礼を申し上げる。



「大横浜地図」昭和2年（1927） 横浜都市発展記念館蔵